様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２４６２

研究課題名（和文）1930年代新聞小説の多角的研究―山本有三・岸田國士・獅子文六を中心に

研究課題名（英文）Multifaceted study of newspaper novels in the 1930s: Focusing on Yamamoto Yuzo, Kishida Kunio and Shishi Bunroku

研究代表者
平　浩一（HIRA, Koichi）

国士舘大学・文学部・教授

研究者番号：００５８３５４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会的に重要な意義を担った1930年代における新聞小説の諸局面を研究対象とした。山本有三・岸田國士・獅子文六の3作家を中心に、新聞小説を時代・文化の集約点と捉え直し、小説の読解と併せて、新聞(社)の特性と対読者戦略、挿絵の視覚的効果、読者受容、演劇・映画との関係、文学史における位置、「非常時」の社会背景、イデオロギーの伝播作用等を総合的に検討した。それらの考察を通して、1930年代の新聞小説（作家）の影響力の形成過程を、後代への影響を見据え、多角的な視座から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、これまで分散的な形で考察されてきた1930年代の新聞小説について、山本有三、岸田國士、獅子文六を軸にしながら、包括的な研究を行うものとして進められた。それにより、歌舞伎・演劇・映画・童謡をはじめとするメディアミックスの様相、小説本文・挿絵・新聞メディアの相互作用、作品に見られる作家の大衆や文化に対する意識、文学ジャンルの多様性の生成とその融合などが明らかになった。その結果、幅広い読者層へのイデオロギーの伝播作用が明確化され、後代への影響について、従前の研究で十分に検討されてこなかったその基盤形成の過程が、戦前／戦中／戦後を横断する形で明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on various aspects of newspaper novels in the 1930s that had social significance.Focusing on the three authors, Yamamoto Yuzo, Kishida Kunio, and Shishi Bunroku, the newspaper novel was re-considered as an aggregation point of the era and culture. Along with reading the novel, we comprehensively examined characteristics of newspapers (company) and their strategies for readers, visual effects of illustrations, reader acceptance, relationships with theaters and movies, position in literary history, social background of " emergency", and ideological propagation.Through these discussions, the process of forming the influence of newspaper novels (writers) in the 1930s was clarified from a multifaceted perspective, with a view to the influence on future generations.

研究分野：日本近代文学

キーワード：新聞小説　大衆　挿絵　演劇　文化統制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

新聞メディアは、明治期から近代文学と常に歩みをともにし、1930 年代、「非常時」が叫ばれる中で、販売部数を激増させた。大衆読者から支持を集めた新聞小説作家は、この時期にオピニオン・リーダーとして大きな影響力をもつに至り、人気を博すと同時に、それゆえ資本・技術・欲望等が集中し国家体制に接近することにもなった。

こうした新聞小説の研究状況について、1997 年、福島行一は「未開拓の多い分野」と明言し「研究法」を提案した（「新聞小説研究法素描」）。その後、本田康雄『新聞小説の誕生』（1998）や関肇『新聞小説の時代』（2007）をはじめ重要な成果がもたらされたが、それらは主に明治期の新聞小説に関する研究であり、1930 年代新聞小説（史）については、作家・作品の個別的な考察は見られるものの、それを体系的に捉えたものとしては、高木健夫『新聞小説史稿』（1964）、『新聞小説史』（1974-1987）の祖述などに限定された。特に、当該領域において必須の検討課題である新聞小説（作家）と権力・戦争との関係、同時代文化・風俗との関わりの中での位置づけ、戦前／戦中／戦後の通史的な歩みを射程に収めた考察は、個別的な研究は提示されてきたものの、包括的な形での研究は十分になされてこなかった。

こうした状況の中で、本研究の代表者と分担者は、折に触れ新聞小説への考察も遂行しつつ、各自の研究を展開していた。代表者・平 浩一は、『「文芸復興」の系譜学』（2015）を中心に、新聞・雑誌メディアを博捜しながら 1930 年代の文学状況を考察してきた。また、分担者・松本和也は、『昭和一〇年代の文学場を考える』（2015）を中心に、戦時下における新聞・雑誌メディアの分析から昭和 10 年代の文学場を問題化してきた。さらに、分担者・後藤隆基は、「明治三十年代京都劇壇と高安月郊交流圏」（2016）等を中心に、黎明期の新聞メディアと同時代の演劇状況のかかわりを東京／京阪両面から検討してきた。

本研究は、上述した研究状況を踏まえ、各自の研究の特性を複眼的な視座として生かす形で、1930 年代の大きな影響力をもった新聞小説（作家）を総合的に把握・解明すべく企図された。

２．研究の目的

本研究は、近代日本に強い影響を及ぼしながら、包括的な考察が十分になされてこなかった 1930 年代の新聞小説について、共時的状況との関連性を分析し、その機能の諸相を明らかにすることを目的とする。特に、戦時下に加速度的にその影響力を増幅させた山本有三・岸田國士・獅子文六の 3 作家を軸に据え、1930 年代の新聞小説が果たした役割を、同時代との相関関係から明らかにしていく。

その際、新聞小説を「小説本文」だけを指すものではなく、新聞社・文学者・読者・小説・挿絵等、様々な要素を含めた、時代・文化の集約点として捉え、研究対象とする。また、アジア太平洋戦争を見据えながら、1930 年代の「非常時」に、新聞小説（作家）の影響力が、具体的にどのように築かれ、どのように肥大化していったのかを研究の範囲とし、多角的な視座から考察を進める。

上記の諸相に肉薄することで、娯楽に包まれながら、日々、「大衆／国民」に発信された 1930 年代の新聞小説の影響力の形成過程を把握していく。その際、基礎的な情報を整理して分析成果を提示しながら、新聞メディアの特徴ならびに研究目的に応じ、文学の他、メディア論、美術史学、歴史学、政治学など、領域横断的な方法論を採用することで、学際的な成果を発信する。同時に、「非常時」のイデオロギーの伝播作用までを分析対象とすることで、戦前／戦中／／戦後という長い射程を確保する。

３．研究の方法

本研究では、新聞メディアの多角性に配慮する基本姿勢に即して、作業量の点からはもちろん、複眼的な観点を確保するため、異なる知見を有する 3 名で、双方向的な体制で相互の考察・分析を点検しながら、調査・分析成果を共有し、研究を遂行する。

同時に、本研究は、戦時下に近衛文麿と深い関係を保った山本有三、大政翼賛会文化部長となった岸田國士、新聞小説「海軍」執筆を契機に海軍報道部嘱託となった獅子文六を軸に、その影響力の形成を明らかにする。その際、「作家」と「国家体制・権力」とを単線的に接続することなく、地盤を形成した 1930 年代の新聞小説に注目する。その作業を通して、新聞小説を、様々な要素を含み込んだ時代・文化の集約点と捉え、共時的状況との相関関係を分析し、その機能の諸相を明らかにする。

具体的な役割分担としては、平が文学者として山本有三、トピックとして文学ジャンルならびに文学史を中心に考察を進める。松本は文学者として岸田國士、トピックとして同時代風俗・文化ならびに挿絵を中心とする。後藤は文学者として獅子文六、トピックとして演劇・映画ならびに関西／関東の比較を中心とする。

3 作家は戦時下に、国家体制に大幅に接近していくが、「作家」-「国家（権力）」を単線的に結び付けることは出来ない。1930 年代の新聞小説とは、新聞社・新聞媒体・作家・挿絵画家・演劇・映画・読者等、時代・文化の集約点であった。それと同時に、新聞小説それ自体が、また新たな影響力を生み、サイクルを描くようにして先の諸要素へも影響を及ぼしていく。こう

した双方向的な循環作用に密やかに入りこみ、結果的に大きな影響力をもたらす力を、本研究ではイデオロギーと捉え、分析対象とする。意識化されたものはもとより、無意識の中でいつしか生成されていったイデオロギーの伝播作用、その循環を新聞小説の総体とし、社会的機能・役割・影響力を導き出す。

なお、新聞小説を様々な要素を含み込んだ時代・文化の集約点と捉える本研究は、広大で流動的な要素を孕んだ問題領域を設定している。そのため、以下の点に留意する。(1) 広い領域・時代を横断する研究であるため、こぼれ落ちた要素の自己点検を定期的に行う、(2) 機械的な作業分担・問題意識や作業の拡散を避け、複眼的な視座を生かして相互点検を行う、(3) 個別の議論に閉塞させず、新たなパースペクティブの開拓へと結びつける。3 名の協力体制とその特性を生かす形で（1）→（2）→（3）の順に自己点検も行っていく。

４．研究成果

1930 年代の新聞小説を、様々な要素を含み込んだ時代・文化の集約点と捉え、その機能の諸相を明らかにする本研究は、当初のねらいどおり、多角的な成果があげられた。11 本の学術論文と共著『新聞小説を考える――昭和戦前・戦中期を中心に』の刊行、4 度の定期共同研究会の開催を中心に広く公開した。ここではそれらの成果を 5 点にまとめたい。

（1）第一に、明治期からの通史的な流れを射程に入れた、新聞小説と歌舞伎、舞台（装置）、映画、童謡をはじめとする、メディアミックスの様相に関する分析が挙げられる。明治初頭の情死事件の新聞報道とその歌舞伎化、新聞小説と京阪の演劇改良や舞台美術（装置）との関係、〈少女歌手〉という視座から映画化・舞台化も考察対象に含み入れた獅子文六『悦ちゃん』の解読等により、時代性・地域性・領域を幅広く横断する成果がもたらされた。

（2）第二に、小説本文・挿絵・メディアの相互作用に関する分析が挙げられる。小島政二郎「海燕」、山本有三「女の一生」、岡田三郎「春の行列」、火野葦平「花と兵隊」の挿絵を担当した中村研一の基礎的な情報に関する整理、書簡を軸にした吉川英治『宮本武蔵』と石井鶴三との相関関係の分析、あるいは鶴三と木村荘八との交流の解明など、主に実証的な形での成果がもたらされた。

（3）第三に、同時代の新聞小説（作家）に対する多くの言説の収集と整理が挙げられる。新聞小説はその性質から、読者層が非常に広く、同時に 1930 年代は非常に多様な作品が連載された。その点において、同時代受容への注目は特に重要な課題であった。ただし、連載という形態から、同時代評はかなり分散化しており、従前の研究において、その整理はまだまだ不十分な状態であった。そうした状況を踏まえ、新聞小説に関する言説を多く収集した点は、今後の研究に資するところが大きいと考えられる。また、それにとどまらず、同時代受容に対する新聞小説作家の意識、ならびに両者の相互作用の分析にまで踏み込んだ点も、本研究の成果として挙げられる。

（4）第四に、（3）に関連する形で、文学ジャンルの問題、ならびに作家の芸術性・通俗性・社会性や大衆への意識の分析が挙げられる。大正末に大衆、大衆文芸、大衆文学等の概念が形成され、通俗文学、純文学といったジャンルも急激に流通するなかで、多様な新聞メディアでは、それらのジャンルが多面的な形で交錯していった。そのような状況におかれた新聞小説作家が、具体的にどのような意識を持ち、創作に具体的にどのような影響を及ぼしていたかを、通史的な形で析出した点は、1930 年代新聞小説への包括的な分析を目指した本研究の成果のひとつとして挙げられる。

（5）第五に、（1）～（4）で挙げた多角的な研究成果を前提としながら、具体的な作品分析、ならびに文学史への位置づけを遂行できたことが挙げられる。新聞小説は、日々の連載の中で、多彩な要素が入り交じっていくため、具体的な作品分析が困難なところがあり、従前の研究でもなかなか考察が進展してこなかった。その中で、上記の多角的な分析を前提とし、岸田國士『暖流』や獅子文六『悦ちゃん』などの具体的な作品分析を遂行できたことは大きな成果であった。同時に、新聞小説は文学史でも同様の理由で位置づけにくさを常に伴うものであり、これまで排除される傾向があった。それを踏まえ、（1）～（4）の視座を前提に再配置を試み、平野謙の「三派鼎立」を中心に、既存の文学史観の問題点を抽出した点も成果として挙げられる。

以上 5 点を総合すると、1930 年代の新聞小説を「小説本文」だけを指すものではなく、新聞社・文学者・読者・小説・挿絵等、様々な要素を含めた、時代・文化の集約点として捉え、その機能の諸相を明らかにすることをねらいとした本研究は、全般的にも一定の成果を獲得でき

たといえる。山本有三の国民文学作家と称されるまでの道程、岸田國士の文化に対する姿勢とその発信等をはじめ、1930 年代の新聞小説の後代への影響、ならびにその影響力の形成過程を、戦前／戦中／戦後を横断する形で明確化することができたことは、当初の目的に即する成果であった。また、今後は、地方新興紙など新聞小説の多様性をより視野に入れた考察や、大衆概念が形成・流通した 1920 年代・戦中／戦後の切断の問題を孕む 1940 年代の分析を中心に、さらに研究の展望が広がる形となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 松本和也	４．巻 第122号
２．論文標題 軍政下昭南市における文化工作(日本語教育)一面――陸軍報道班員・井伏鱒二『花の町』を手がかりに	５．発行年 2019年
３．雑誌名 立教大学日本文学	６．最初と最後の頁 36-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00018506	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本和也	４．巻 第62号
２．論文標題 吉川英治作『宮本武蔵』における石井鶴三挿絵の基礎的研究	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文学研究所報	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本和也	４．巻 第30巻第2号
２．論文標題 昭和戦前期・岸田國士の新聞小説	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文教大学国際学部紀要	６．最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤隆基	４．巻 第225号
２．論文標題 「盛糸好比翼新形」及二代目盛紫考―明治期吉原遊廓の情死事件とその歌舞伎化をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 藝能史研究	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本和也	4．巻 第17号
2．論文標題 昭和一〇年代の新聞小説論――通俗性・芸術性・社会性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立教大学日本学研究所年報	6．最初と最後の頁 22-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00017026	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松本和也	4．巻 第23号
2．論文標題 昭和10年代における〈文化〉論：Ⅰ――大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 湘南フォーラム	6．最初と最後の頁 69-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本和也	4．巻 第20号
2．論文標題 挿絵画家としての中村研一――「海燕」「女の一生」「春の行列」「花と兵隊」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大衆文化	6．最初と最後の頁 56-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平 浩一	4．巻 第39号
2．論文標題 「通読」される新聞連載小説 ―― 山本有三「生きとし生けるもの」「波」「風」の評価軸の形成	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国文学論輯	6．最初と最後の頁 27-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本和也	4．巻 第7号
2．論文標題 吉川英治『宮本武蔵』〈後半〉における〝道、 —— パラテクストと石井鶴三挿絵	5．発行年 2018年
3．雑誌名 信州大学附属図書館研究	6．最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤隆基	4．巻 第119号
2．論文標題 浅井忠と〈舞台美術〉 —— 明治三十年代京阪の演劇改良・翻案劇・新聞小説	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立教大学日本文学	6．最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 後藤隆基	4．巻 第7号
2．論文標題 石井鶴三と舞台装置・序説 —— 石井鶴三宛木村荘八書簡を補助線に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 信州大学附属図書館研究	6．最初と最後の頁 77-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 後藤隆基
2．発表標題 新派と岸田國士
3．学会等名 歌舞伎学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 平 浩一
２．発表標題 近代日本文学と横断の問題 —— 山本有三の調査・研究を事例に
３．学会等名 方法論の再検討共同研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 後藤隆基、斎藤理生、杲 由美、平 浩一、松本和也、	４．発行年 2020年
２．出版社 パブリック・ブレイン	５．総ページ数 118
３．書名 『新聞小説を考える——昭和戦前・戦中期を中心に』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松本　和也 (MATSUMOTO Katsuya) (50467198)	神奈川大学・外国語学部・教授 (32702)	
研究分担者	後藤　隆基 (GOTO Ryuki) (00770851)	早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・助教 (32689)	